

社会文化史 Social Cultural History

奈良勝司

キーワード…村請制、寄合、持分、袋、客分、空気、アイデンティティ、他者性、信頼、共同体存続の自己目的化

はじめに

「社会文化」とは、本質的でありながら、同時になんとも曖昧^{あいまい}模^も糊^ことした言葉でもある。それは、政治や経済、宗教、思想などに比べるより包括的に地域や共同体の性格を表しているようにみえる一方で、それゆえ超時代的な文明論や人種論と同義に語られてしまうような側面もあり、その具体像や時代ごとの変遷（歴史性）がつかみにくい概念でもある。

また、著者はもともと社会文化史を専門に学んできたわけではなく、政治や思想・世界認識などの問題視角から日本史にアプローチしてきた身である。そのため、社会文化という概念を一つのカテゴリ

リーとして定義し、その今までの成果を網羅的に把握した上で、的確に代表作を提示するような能力は備えていない。なので、以下で紹介する文献とそれをもとにした議論は、著者の個人的判断・解釈にもとづく、あくまで主観的な一類型である。

とはいえ、読者諸兄が独自に日本の社会文化を考える際の一つのひな形が提示できれば、本稿はまったくの無駄には終わらないはずだし、それが力量の制約を踏まえた上での著者の責務だろう。そこで本稿では、その時々に見られた社会文化の構造に着目しつつ、時代ごとの変化（展開）も追えるような記述を心掛けた。また、必要に応じて著者自身の分析を挟みこみ、一つの理解の筋道の提示を試みた。我々はこの方法により、時代に応じて変容した歴史性の側面と、時代を越えて共有され、あるいは同一ではなくとも前時代の影

響を色濃く残した側面の、両方の視点から日本の社会文化を考えることができるだろう。

取り扱う時期は、徳川期以降の近世く近現代（十七～二十世紀）とした。これは著者の力量によるところが大きい、別の理由もある。それは、「時代劇」といえば通常江戸時代を舞台にしたものを指すように、この期間が社会文化を語る時に連続性と断絶性の両方を現在に直結するかたちで検討できる、有効な射程になり得るからである。社会文化の不変性・安定性と変容性・展開性の両面を考える、有効な視座だということである。

一 江戸社会

日本の近世社会は長らく、〈鎖国〉という状況を前提に置きつつ、その近代とのつながりを考えるという思考の文化が定着してきた。たとえば西洋近代と比較した場合の遅れや後進性を強調する場合は、国を閉ざしたことイノベーションに後れをとり、産業革命を引き起こした西洋列強のような発展を果たせず、十九世紀以降の国家間競争において後塵を拝したのだと説明されてきた。逆に、二十世紀後半以降の高度経済成長を踏まえて、非西洋諸国としては屈指の発展を遂げた要因が探し求められた時には、限られた土地のなかで集

約的な労働と勤勉意識などを確立したことが有利に機能したと理解されてきた。

こうした理解は、江戸期を否定的に捉えるにせよ肯定的に捉えるにせよ、基本的には近代以降と同じ「日本」を前提とした上で、その停滞や発展を論じてきたわけだが、外部の観察者の目を通してむしろ断絶の側面を訴えた著作が、渡辺京二『逝きし世の面影』（初刊、葦書房、一九九八・平凡社ライブラリー、二〇〇五）である。本書は、幕末に訪日した欧米人の記録を精力的に読み解くことで、彼らが一様に、当時の日本に欧米社会とは全く異なる文明を見てとると同時に、自分たち西洋の影響を受けることで、日本人が将来的にこの文明を失っていく運命をも予言していたのだと指摘する。

渡辺は、江戸期から明治期への移行に関して、「われわれはまだ、近代以前の文明はただ変貌しただけで、おなじ日本という文明が時代の装いを替えて今日も続いていると信じているのではなからうか。つまりすべては、日本文化という持続する実体の変容の過程にすぎないと、おめでたくも錯覚して来たものではあるまいか」と問いかけた上で、「実は、一回かぎりの有機的な個性としての文明が減んだのだ」（二〇頁）とする。そして、欧米人の紀行文を駆使して、彼らの目を通して失われた文明を描く。もともと、このような手法を用いる際には、しばしば西洋の色眼鏡Ⅱオリエンタリズムが問題となるが、それには「異邦から来た観察者はオリエンタリズムの眼鏡

をかけていたかもしれない。それゆえに、その眼に映った日本の事物は奇妙に歪められていたかもしれない。だが彼らは在りもしないものを見たわけではないのだ」（五二頁）と、バイアスを踏まえた上での活用を訴える。

本書の最大の成果は、以上のような観点に立つて、豊富な記録から当時の日本の民衆の愛想の良さ、とにかくよく笑うこと、質素だが幸せそうな暮らしぶり、欲のなさ、豊かで満ち足りた生活実態、大きく派手ではないが繊細でこじんまりとした生活用品の数々、街にひしめく人々の多様さ、分割された職分、などを重厚に描き出したことである。それらは、たとえば初代駐日米国総領事ハリスによつて、「衣食住に関するかぎり完璧にみえるひとつの生存システム」（二四頁）と総称されたものであつた。渡辺は、既存のマルクス主義歴史学や近代化論では「アジア的停滞」と位置づけられてきた日本の近世を、ミニマムで多様な文化がゆつくりと循環する社会として再評価し、近代の到来を發展ではなく喪失という観点から位置づけ直した。本書は近代を総体的なシステムとして批判的に捉える国民国家批判論にも大きな影響を与え、その理論的根拠の一つとなつていくが、それを可能としたのは、近代の使者の目を通して語られる圧倒的に生々しい証言の数々であつた。

近世社会をいびつな克服対象ではなく、一つの哲学に貫かれた体

系とみるなら、近代以降に残つた習俗も、後進地域の悲劇ではなく、独自の様態を守つた文化の息づかいなのだということになる。宮本常一『忘れられた日本人』（未來社、一九六〇）は、戦後復興のもとで社会が大きく姿を変え始めていた一九五〇年代に、地方の農村社会の風俗や生活様式を丹念に書き留めた著作である。ジェンダーによるタブー化・階層化を経ず、田植え中に性についてあけつぷろげに語り合う女性たち（一〇五頁他）など、鷹揚な実態が紹介される。一つの村にとどまらず広範な地域を移動した「世間師」（一七九頁）に関する記述も面白いが、彼らも寄る辺のないディアスポラというよりは、村落の多様性や懐の深さの象徴として描かれるのである。手法としては、各地の古老へのインタビューが中心となつている。明治維新の際の五箇条の誓文で、「各^{おの}の志をとげ、人心をして倦^うまざらしめん事を要す」と謳^{うた}われた時に、「カカスミ」Ⅱ既婚者への夜這いが頻発したという話（二〇四頁）などは、公的な文書記録には残りにくいぶん、生々しくも同時に可笑^{おか}しさを兼ね備えたエピソードだといえる。

寄合の実態の証言も貴重である。そこでは時間をかけた熟議によつて、スピードや効率とは無縁ながら、構成員全員の納得を重視する意思決定がなされたという。その様子はたとえば、「村でとりきめをおこなう場合には、みんなの納得のいくまで何日でもはなしあう。はじめには一同があつまつて区長からの話をきくと、それぞ

れの地域組でいろいろに話しあつて区長のところへその結論をもつていく。もし折り合いがつかねばまた自分のグループにもどつてはなしあう」(九頁)といった具合である。そもそも決定を厳格に求めていなかったともいえ、「物を議決するというよりは一種の知識の交換がなされた」(四六頁)とも語られる。ここでは、調和が決定に向けた手段ではなく、むしろ目的そのものであり、構成員が知識を分かち合い、認識を一体化することが気長に待たれたのである。

著述の背景には、「われわれは、ともすると前代の世界や自分たちより下層の社会に生きる人々を卑小に見たがる傾向がつよい。それで一種の悲痛感を持ちたがるものだが、御本人たちの立場や考え方に立つて見ることも必要ではないか」(二五五—二五六頁)と、村落共同体における「階層分化」ではなく「平均」の側面への注目がある(二五〇頁)。『逝きし世の面影』へと通ずる、近世の社会文化に対する価値転換がすでに表れている。

これらの点は、一九八〇年代頃から近世史研究が具体的に解明していることでもある。以下では近世社会の二大構成員であつた武士と農民(村落居住者)に関して、笠谷和比古『近世武家社会の政治構造』(吉川弘文館、一九九三)^②、渡辺尚志『近世百姓の底力——村からみた江戸時代』(敬文舎、二〇一三)^③を紹介しておきたい。

『近世武家社会の政治構造』は、大名が絶対的統治者として家臣団の上に君臨していたわけではないことを説いた同氏の『主君「押込」の構造——近世大名と家臣団』(平凡社、一九八八)講談社学術文庫、二〇〇六)を発展させ、武家社会全体の構造を描いたものである。「主君の権力なるものはそれが藩領の全体を覆い尽くした時、逆説的なことに名目化していく「……」藩という客観的な政治組織体の中に包摂され、この組織体の意思に従属せしめられることになる」(二〇三頁)との一般原則が示され、江戸時代には古典的なイメージに反して専制権力が存在し難かつたことが構造的に論じられる。

具体的には、「大名(藩)における意思決定」は、下位者の提案・発議を上位者が追認する「合議」形式で行われ、そうした政治決定には「家老・重臣はもとより、実務に携わる末端役人までもが、実質的に参与」していたと指摘される。つまり、政治方針を定める際に、君主制ではあるが「その決定力が特定の人間・階層に局在するものではなく、末端役人にまで至る全階層に互つて配分」されていたのであり、そうした有り方を規定していたのは身分階層的な区分けに応じた「持分」意識であつたと述べられる(二二〇頁)。

こうした分権主義の原則は、いわゆる幕藩関係においても同じであつた。大名改易を行う際も「合理的根拠を開示しつつ諸大名の了解の獲得に努める」(四三八頁)必要があつたし、「幕令の一方的な

下達と見られるものも、実は大名家側との相互作用的な関係——意向確認・意思疎通・調整・制御・抵抗、等々——を通して、現実には機能していた」（四四四頁）とされる。また、徳川政権の内部においても老中制は全会一致原則で貫かれていた。

こうした傾向は、武家社会の全般を貫いていた。興味深いのは、権力の分権性はその分裂を意味せず、高い統一性と矛盾しなかったことである。つまり、分権主義というよりも全体主義という実態に近く、「社会のすみずみにまで秩序が浸透し」て「規律化が高度に進行する」一方で、「この集中はただちに「専制」、すなわち首長・上位者の権力の無制約性ないし圧倒的強大性、そして下位者の自立的存在の否定、その自律的意思の抑圧というものを意味するものではなかった」（四三五頁）のである。権力の集中や個人主義の発達を経ることなく、あたかも一己の有機体のように社会が「持分」を分け合ったというわけだ。

そしてこのような力学は、統治階級であった武士だけにとどまらず、人口の大半を占めていた農民（村落居住者）の世界においても同様であった。渡辺尚志『近世百姓の底力』は、江戸社会が成熟・安定するにつれ、村落が領主への税負担を個人ではなく共同体単位で担う村請制を確立させ、個人が相互に密接につながり合いつつ、集団主義のもと生活維持を図っていく様子を描く。具体例としては、「村の耕地は個々の村人のものであると同時に、村全体のものでも

ある」（九一頁）との観念のもと、田畑や山林が割地慣行や入会地などによって個人ではなく集団での共同所有とされるなど、経済面で私有財産制が確立しなかったり、借金をするのが当たり前で、返済が滞っても当人の生活を破綻させないための救済措置が図られたり、といった事実が紹介される。富裕者には貧者を経済的に救済する倫理的義務があったことも指摘され、総じて共同体の維持が優先されたことが示される。

これらは、西洋的な人権意識とは別の動機から重層的に作られたセーフティネットであり、「兄弟・親類・五人組・同族団、そして村と、何重にも相互扶助の輪が存在していた」（一〇四頁）。また、「百姓は同列であり、特定の家だけが特権を享受すべきではないという考えかたがしだいに強まっていた」（一六二頁）とも指摘される。江戸社会も後半の十九世紀になると、こうした慣行は思想として文章化されるようになり、たとえば農村指導者の宮負定雄は、「二村の内は一家のごとく、互いにあい親しみ睦まじく暮らすが道」（二九三頁）と、村を一つの家族に譬^{たと}えるに至る。近代につながる家族国家観の萌芽である。

二 近代化と現代社会

これらの著作は、近世社会の特徴として、集団主義的な生活・政治慣行、自足的で循環的な日常の時間観念、共同体の分化・共存とその内部における経済・意識両面での一体性を描いている。では、こうした共同体の有り様と機能は、近代以降はどうなっていたのだろうか。『忘れられた日本人』が示すように、それは決して断絶はせず強固に残り続けた一方で、『逝きし世の面影』が示すように、近代化の過程で失われ、回顧される対象ともなっていた。ならば、二者択一ではなく連続と断絶の関係性こそが重要となろう。

その意味で、明治維新で統一国家が生まれた後に、地域社会と政治の関わりが正面から問われることとなった自由民権運動は、近世の社会文化が近代化の過程で蒙った変化^{こうむ}を考える上で、有効な対象といえる。通説では、自由民権運動は長らく政府権力とこれに対抗する民権運動の二項対立図式で語られてきたが、牧原憲夫『客分と国民のあいだ——近代民衆の政治意識』（吉川弘文館、一九九八）は、後者をさらに運動家と彼らに動員される民衆の二者に分け、政府権力・民権運動家・民衆という三者の鼎立状態として近代初頭を描いた。国家権力を握っているかその外側にいるかという観点からみると、政府と運動家・民衆の区分けとなるが、西洋化によって社会を

改造するか否かという観点からみると、政府・運動家と民衆のように区分されることとなる。

本書の特色は、民衆を、自ら慣れ親しんだ伝統の保持を望み、近代化された中央政治に国民として参加することを拒絶する「客分」として描いたことである。そしてこの伝統こそが、これまで紹介してきた江戸時代以来の生活様式であり、社会文化に他ならない。

これまでの著作が指摘してきた一方的な抑圧の否定は、ここでは「仁政」という概念で語られる。本書はこれを、「身分制国家にあつて、客分たる民衆に対して領主・家臣が当然に負うべき政治的責務であり、民衆がおずおずとお願ひしたり、領主が恩着せがましく与えたり与えなかつたりできるものではなかつた」（五三頁）と解説する。だから、民権運動家が民衆を啓蒙しようとしたのは、（主観的にはしばしばそのように観念されたにせよ）政治と無関係な人々を初めて引き出そうとしたのではなく、実際には政治への関与の質を変えようとしたのであつた。牧原は、民衆にとつての民権運動（家）を、「明治政府ときびしく対立しながらも、自由放任／仁政・徳義、国民／客分、という対抗図式では、基本的に政府とおなじ側にあつた」とし、既存の共同体世界の破壊者と位置づける（一三一頁）。

「客分」とは、「持分」を介して消極的な形でのみ政治に関わる存在で、民権運動（家）は政府とは別の動機でその解体を図ったわけ

だが、この運動すら共同体の再編であつたと指摘するのが、松沢裕作『自由民権運動——〈デモクラシー〉の夢と挫折』（岩波新書、二〇一六）である。松沢は近世以来の共同体を「袋」と呼ぶが、民権運動を担った政治結社も、「戊辰戦争において、近世身分社会の基本単位となっていた「袋」がやぶれてしまった」（二六頁）事態への、対応の産物だつたというのである。つまり、個人主義不在のなか、人々の自我を外から規定していた「袋」が明治維新で破壊されたことに対する、精神の防衛行動と見なすのだ。具体的には、「身分制社会が解体した状況、すなわち所属すべき「袋」を人びとが失ってしまった時代に、人びとが新たな抛り所をもとめた結果」（五一頁）、「何らかの組織に参加することで将来の保証を得たいという願望」（二七九頁）が盛り上がり、民権運動の基盤になつたという。民権結社の総数は判明している限りで二二一六に及んだとされるが（五〇頁）、従来は地域や身分で区切られていた共同体が、政治信条やその表現法を共有する人々を単位に再編成されたというわけだ。

注意しなければならないのは、このような回路を経て新たに再編された共同体の政治態度は、もはや状況の変化によって主体的に刷新させ得る選択肢ではなく、アイデンティティそのものとして、容易に動かしがたいものになつてしまつてゐるということである。たとえば福島県では、県令の三島通庸（みちつね）とこれに対立した自由党の双

方に「対話の意思の欠如」（一五四頁）が確認でき、「三島も河野（広中）もお互いのことを「敵」としてしか認識していない」（二六二頁）状況下で、「妥協の余地のない対立」（二六一頁）が展開したとする。個人レベルで強固なアイデンティティが備わっていれば、政治判断は折々の態度として可変的なものになる。しかし、共同体自体がアイデンティティとなれば、そこでの政治立場は可変的な暫定態度ではなく、物神化され硬直化したものになるのは避けがたいであろう。

しかも、このような環境では、同じ行動でも自派なら許されるが他派は駄目という事例が多発することになる。山本七平『「空気」の研究』（初刊一九七七…文春文庫、一九八三）⁽⁴⁾は、一九七〇年代を舞台に、このように論理でなく、「空気」が状況を左右する世界を描いた。山本は保守派の立場から革新勢力の欺瞞（^{ぎまん}）に切り込み、それを日本文化論に昇華させるという手法をとるが、たとえば戦時中のリンチにつき、特高警察が日本共産党に行つたものは批判されるが、共産党が内部で行つたものに対しては、不問に処すか極めて追及が甘い（ダブルスタンダードが設けられている）とする。つまり、リンチという「行為」を基準にものを考え態度を決めるのではなく、誰の「行為」かという主語を基準に判断が下されている点を指摘する（二二一頁他）。

〈主体〉をまたぐ普遍論理を尊重しないのは、それをする、自らの属する共同体が揺らいだり、場合によつては分裂・解体してしまふ危険性を抱え込んだりすることになるからであらう。自立した個人が自らの内面から立ち上がる倫理と規範を尺度に共同体を選ぶのであれば、それはあくまで原理上は暫定的な環境である。共同体の性格が変容したりあるいは自らの考え方が変化をきたし、そのことによつて自身と共同体の相性に齟齬が生じたりするようなことが起これば、関係を解消することは十分にありうる。しかし、個人レベルの自我を構築することなく、どの共同体に属するかという環境自体が実質上の自我であるならば、共同体の維持こそが最優先される。共同体の内と外で平気でダブルスタンダードが設けられ、しかも当事者はそのことになんら痛痒を覚え^{つよう}ずという事態が容易に発生するのである。

したがって、持続自体を目的とする共同体は、基本方針すら鶴の^{ねえ}ように変形し続け、あのような状況で我々がこのような行動をとつたのは他に仕方がなかったのだという、「情況倫理」（二〇七頁他）で過去の行動を正当化する。そして、ある時点での共同体内部の判断に至つては、この最低限の説明もなく、その場の「臨在感」（四〇頁他）によつて決定されるというのである。近代的再編を遂げた共同体Ⅱ「袋」は、中長期的には、その掲げる主張の一貫性や筋の通し方よりも延命こそを優先するし、時期を区切れば、政治スタンス

の論理的整合性よりも、感覚の共有（内部での異論のなさ）を優先するというわけだ。

もつとも、自己完結的で「日本」と「世界」が同義に近かつた近世⁶と異なり、近代以降の日本は西洋型国際秩序に参入し、地球規模に広がつたより大きな世界の一部となつた。そこで日本列島の内部と同様に、容れ物である日本自体も一つの「袋」のように機能していることを示したのが、白井聡『永続敗戦論——戦後日本の核心』（太田出版、二〇一三）である。諸外国の「皇化」をスローガンに出発した戦前と異なり、対外膨張挫折後の戦後社会を扱う本書は、しかし『「空気」の研究』とは対照的に、戦後の保守派（与党）が重ねてきた欺瞞^{ぎまん}を痛烈に批判する。その骨子となるのが、アメリカと戦つた戦争の大義（正当性）を強弁しながら、同時に世界情勢の捉え方までアメリカと一体化し、物心両面で従属する体制をとり続けているという問題構造の指摘である。戦後レジームからの脱却を謳^{うた}う政権が、ねじれた体制の一番の守護者であると喝破するのである。

日米安保体制を憲法より重んじながら、イデオロギーの次元で「大東亜戦争」を肯定する精神態度は、控えめにいつてかなりアクロバティックで、露骨に言えば完全に論理破綻している。しかし、共同体がその時々^{とき}に直面した状況に「空気」を尺度として対応し、時間の前後における論理矛盾を度外視して共同体Ⅱ「袋」自体の当

面の安定（と思われたもの）を選んできたという観点でみれば、これは近代以降の〈伝統〉の遵守でもあるのだ。

面白いのは、この両書がいつけん政治的には正反対にありながらも、問題を構造次元に掘り下げてみる作業の深さと鋭さゆえに、反対の党派も同様の問題性を抱えていることをきちんと示している点である。つまり、両書は執筆された時期の社会状況に規定された政治的にアクチュアルな著作ではあっても、党派のプロパガンダに終始するものではまったくなく、近世から近代を経て現代にまで展開した社会文化を示しているのである。

三 〈鏡〉を通して見えるもの——おわりに代えて

ここまでは、近世から近代にかけての日本の社会文化を直接に観察・洞察した著作を紹介してきた。しかし、江戸後期の経世家であつた海保青陵が「目ハ目ヲ見ル事ナラズ。心ハ心ヲ知ル事ナラズ。其国ノ人ハ其国ヲ知ル事ナラズ」と述べたように、また幕末維新期の儒者で啓蒙知識人でもあつた中村正直が「人ノ面目は、自ラ見ル能ハズ、必ズ水ニ照シ、鏡ニ監、而ル後其ノ妍媸ヲ識ル」と述べたように、対象の特質はその対象だけを見てはわからない場合も多い。そこで最後に、異端として排除された者、および他国の文化

（この対比）の観点から、間接的に日本の社会文化を浮き彫りにした著作を紹介したい。

自作の紹介で恐縮だが、奈良勝司『明治維新と世界認識体系——幕末の徳川政権 信義と征夷のあいだ』（有志舎、二〇一〇）は、江戸後期に官立の学問教育機関である昌平坂学問所（昌平黌）で学んだ儒学エリートの幕臣層を縦軸に、彼らの立場から幕末政局を分析し、明治維新の性格を論じたものである。ただし、彼らが明治維新の主役であつたとか、その動向こそが変革の本質であつたと訴えるものではない。むしろ本書は、彼らの政治路線自体は否定され、未発の可能性に終わつたと評価する。つまり政治闘争の過程で異端として排除されたのであり、しかしまさにその異端性ゆえに、彼らの政治構想は逆説的に、維新を主導し近代日本を牽引した政治勢力やその路線の本質を逆照射すると位置づけた。要するに、「維新の変革主体」が昌平黌エリートを躍起となつて否定した論理と心理にこそ、近代日本の根本的性格が投影されていると見たのである。

具体的には、昌平黌エリートは、国家同士が国家対等観にもとづき契約（条約）で相互関係を結ぶ世界秩序を構想しており、そのため開国を屈辱視することなく、また「信義」が国家の軍事行動を制する力を信じてきたとした。逆にいえば、「維新の変革主体」は言葉の約束など弱肉強食の世界では無意味な空論だと決めつけ、また江戸期のように外国を劣位の管理対象とみる視座を克服し

えなかつたために、昌平黌エリートを売国奴のように見なし、他者性を欠いた世界観を膨らませていったと論じた。つまり、他者性の欠如と契約観念への不信が対外観の根底に定着したのが、日本近代の基調だという議論である。

ただし厄介なことに、「他人を見たら泥棒と思え」という感性は、特に対外認識においては、戦後に日本の「庇護者」として居座ったアメリカを除けば、今日でも諸外国に注がれ続けている、現在進行形の眼差しでもある。その点で、山岸俊男『信頼の構造——こころと社会の進化ゲーム』（東京大学出版会、一九九八）は、社会心理学の豊富な実験データから、そのような生理的感性を明快に否定する快作である。本書は一言でいえば、多くの日本人的感性に反して、信頼という概念がリアリズムにもとつき実効性に満ちていることを証明する。言い方を変えれば、「お人よし」であることは、学習能力さえ備えていれば、猜疑心さいぎに満ち警戒感のもとに対人関係（あるいは国家関係）を取り結ぶよりよっぽど強靱で、さらには効率的ですらあるという主張なのである。本書は主としてアメリカと日本の社会慣行を対比させる。そして、信頼の感覚がそもそも構造的に抜け落ちている日本の社会文化を、「安心」と「信頼」を混同した状態として、「集団主義社会は安心を生み出すが信頼を破壊する」（一頁）という観点から浮き彫りにするのである。

信頼の有効性を認めるにせよ、国難に瀕ひんした危機状況では過剰な

依存は危険だという考え方もあるだろう。しかし本書は、「信頼がもつとも必要とされるのは社会的不確実性の大きな状態においてである」（六一頁）と述べて、その思い込みを明快に打ち砕く。「社会的不確実性の大きな関係で必要とされているのは信頼であるのに対して、社会的な不確実性の低い安定した関係で生み出されるのは安心である」（六〇頁）との指摘は、『逝きし世の面影』が描いた「江戸」という桃源郷があまりにも長く持続できたことが、幕末に到来した激動期に信頼を身に付ける機会と可能性を奪ったことを想像させる。そしてそれは、他者と共有可能な論理整合性や筋道の一貫性を犠牲にして、共同体の延命と内部の調和を軸とする「袋」の力学を形を変えて再生したことが、現在に続く独自の近代社会を形作った一方で、国際情勢の変化に対する「身動きの取れなさ」も生み出したのだと示唆しているように思われる。

本稿では「袋」理論の刺激から学んで、自覚的に党派性を横断した著作の選出を試みた。自分自身も特定の「袋」に閉じこもらないようにする努力は、それができているかどうかの判断は別にして、本稿の性格からして執筆の大前提だと考えたからである。また、日本の社会文化を正や負いずれか一方の側面から描くことも避けた。長所と短所は、一枚のコインを表裏のどちらから見ても変わるからである。そうした配慮が安易な相対主義や羅列趣味に終わらず、

光と影の両面を併せ持つ、日本の社会文化の構造とその時代的展開を、仮説ではあれ読者に示せているとしたら、筆者の目的は一応達成されたことになる。

注

- (1) 史料引用中の読み仮名・注記は引用者による。以下同じ。
- (2) 武家社会の文化については、笠谷和比古『江戸御留守居役——近世の外交官』（吉川弘文館、二〇〇〇）、藤田覚『泰平のしくみ——江戸の行政と社会』（岩波書店、二〇一一）なども参照。
- (3) 村落研究の成果は豊富だが、渡辺尚志『百姓の力——江戸時代から見える日本』（柏書房、二〇〇八）、角川ソフィア文庫、二〇一五、深谷克己『百姓成立』（塙書房、一九九三）、大藤修『近世村人のライフサイクル』（山川出版社、二〇〇三）なども読みやすくまとまっている。民衆の政治参与については、平川新『紛争と世論——近世民衆の政治参加』（東京大学出版会、一九九六）などが刺激的である。
- (4) 山本七平がイザヤ・ベンダサン名義で書いた別作の『日本人とユダヤ人』（角川書店、一九七二）も参照。戦争時に日本社会を概括したものとしては、ルース・ベネディクト（長谷川松治訳）『定訳 菊と刀——日本文化の型』（社会思想社、一九六七「初出は一九四八年、原著の初出は一九四六年」）が有名である。
- (5) 分析を突き詰めている分、その洞察は党派的イデオロギーの枠内に納まらず、今日の「保守」政治の批判になっているのではないかと思われる部分も多々ある。
- (6) 山下範久『世界システム論で読む日本』（講談社、二〇〇三）は、近世にも外部との交流自体はあつたが、「地域の境界を越える交通自体を遮断する

のではなく、むしろ域際的な交通が域内的な空間秩序に作用しないように隔離ないしは排除する制度やメカニズム」が存在し、「域際的な交通を不可視化することで、地域的な空間秩序があたかも完結したひとつの「世界」であるかのような全体性を仮構した」とする（一一三頁）。

- (7) 「東瀛」（蔵並省自編『海保青陵全集』八千代出版、一九七六、三三七頁）。
- (8) 「論遣人於外国使審其情形」『敬宇文集』三（吉川弘文館、一九〇三）、一一丁。